

2021 年度

2/2 入学試験

国 語

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 放送の指示にしたがって、解答用紙の指定された場所にQRコードシールをはり、受験番号・氏名を記入します。
3. 試験時間は45分です。
4. 問題は、1ページから18ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に^{かくじん}確認し、足りないページがあったら申し出てください。
5. 答えはすべて解答用紙に記入してください。
6. 試験が終わった後、問題冊子・解答用紙とも回収します。
7. 記述問題では、指定された字数の8割以上は書いてください。ぬき出し問題では、指定された字数で答えてください。どちらの場合も、句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

1 次の1〜8の——線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 敵のみごとな作戦にコウサンする。
- 2 うまい絵だとは、おセジにも言えない。
- 3 近くのハシユツジヨに落とし物を届ける。
- 4 ケイツツな行動をつつしむ。
- 5 箱根駅伝の四区をソウハする。
- 6 氣力を奮って立ち向かう。
- 7 モーツアルトの曲をひきこなせるかどうかは、ピアニストの試金石となる。
- 8 歴史的に重要な公文書が開示される。

2 次の1～5について、ア～オの——線部のうち、性質・働きの異なるものをそれぞれ一つずつ選び、記号で書きなさい。

1 ア 学校に行く。

イ 遊びに行こう。

ウ 勉強に遊びにといそがしい。

エ ろう下を静かに歩く。

オ おこられるに決まっている。

2 ア 笑われないようにする。

イ 戸が開かない。

ウ 少しもうれしくない。

エ だれもないようだ。

オ 雨はまだやまないだろう。

3 ア 寒いから家にいよう。

イ 友達から返事が届いた。

ウ ここからはそう遠くない。

エ 牛乳パックから紙を作ろう。

オ 思い上がりから不評を買う。

4 ア そんな話は信じられない。

イ 空にきれいな星がかがやく。

ウ 小さな貝がらを大切にする。

エ 世界中のいろんな土地に行った。

オ 友人のおかしな態度が気になる。

5 ア 彼の悲しみははかりしれない。

イ その大きさを運ぶのは無理だ。

ウ 健康の大切さが身にしみよ。

エ あの人は美しいのを鼻にかけている。

オ 質のよしあしが見分けられる。

③ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

藤田さんふじたさんに久しぶりに会った。

京都に住んでいる藤田さんと会えるのは滅多めったにないことだから、とっておきの東京散歩コースを考えていた。本郷のケーキ屋さんでたっぷり甘い物あまを食べよう。それから東大の赤門をくぐって、銀杏並木いちょうの下をしばらく歩こう。本の背表紙を並べたような外観の図書館も見せたいな。

しかしそんな私の夢の散歩コースは、藤田さんにとっては悪夢の連続だった。すべて鳩はとのせいだ。

藤田千鶴ちづるさんは、十八年前にネットで知り合った歌人の友だちだ。メールは無数にしてきたのだが、会ったことは数度しかない。だから鳩はとがこんなに嫌いきらいと知らなかったのだ。

東大の中をまともに散歩することはできなかった。そこらじゅうに歩いているたくさんたくさんの鳩はとにおびえてしがみついている藤田さん。必死でなだめる私。四十代後半の女二人が、なぜか大学の中でしがみつきあって歩いている。もつとのんびり優雅ゆうがに歩くつもりだったのに……。

やっと鳩はとのいない道を見つけたと思ったら、「左から飛んでくる音がする」と藤田さんが言うので仕方なく引き返す。私には全然聞こえませんけど……。

しかも、苦手なのは鳩はとだけではなかった。

「銀杏の枝に瘤こぶがたくさん突き出でていて怖い」と安田講堂までの並木道を、目を伏せながら硬直こうちよくして歩く藤田さん。え、どこにそんな瘤こぶが？ と、^①またしても私には全然見つけられないのだ。

どうやら藤田さんは、私よりずっと、^②目の細かい筈はずで、世界を掬すくいとっているらしい。

「鳩はとがなぜそんなに嫌いなのか」と聞くと、「鳩はとって、雑ざつでしよう？ 動きとか」と藤田さんは言った。私は雑な自分の感受性を、藤田さんだけには隠かくして生きていこう、と、^③密ひそかに決意した。

そんな藤田さんの二冊目の歌集を昨日読んだ。

ちよんちよんとタオルの隅すみでその頭すずめふいてやりたし雀すずめのあたま赤いから金魚と呼んでかわいがり悔くやしいときは握にぎりしめていた

藤田千鶴『白へ』

(注) 同

一生を繋がれていたガレージに来てくれた雀、ヤモリ、夕焼け
つらいなら遠くへ行っていいんだよお皿のうえに載せる鉢植え

同 同

④ よく読むと奇妙だ。雀の頭をタオルで拭いてやりたいなんて普通思わないよ。金魚と呼んでいた赤い物って、結局何なの？ 三首目は、犬の目線で世界を見ているのか！ そして鉢植えに遠くへ行っていていいと言
うなんて、この人、やっぱり少し変じゃない？

私はすっかり嬉しくなってしまった。

自分の頭を拭けない雀、金魚になれない赤い物、繋がれっぱなしの犬、どこにも歩いて行けない鉢植え。生あるものの本来持つ
それぞれの不自由さを慈しみ、対象に少しでも踏み込もうとする心が、このような歌を生み出しているのだと思う。

鳩の歌は、やっぱりなかったんだけれども。

注 同 Ⅱ 右の行の藤田千鶴『白へ』という出典と同じという意

(錦見映理子『めくるめく短歌たち』書肆侃侃房 による)

1 ——線①「またしても」とありますが、これはどのようなことが再び起こったということですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ
選び、記号で書きなさい。

ア 藤田さんが苦手なものが現れること

イ 藤田さんが意外なものを苦手に行っていること

ウ 藤田さんに知覚できるものが知覚できないこと

エ 藤田さんの考え方についていけないこと

オ 藤田さんがありもしないものを嫌うこと

2 ——線②「目の細かい笊」とありますが、これはどのようなものをたとえた言葉ですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 高度な知性

イ 鋭い感受性

ウ 丁寧な行動

エ 複雑な感覚

オ 綿密な計画性

3 — 線③「密かに決意した」とありますが、これはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 藤田さんにいつか追いつきたいと思ったから

イ 藤田さんと二度と会わないつもりだから

ウ 藤田さんに嫌われたくないと思ったから

エ 誰にも理解してもらえないと思ったから

オ 藤田さんに対して優越感にひたっているから

4 — 線④「よく読むと奇妙だ」とありますが、どのような点で奇妙なのですか。その説明としてふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で書きなさい。

ア 本来そこに感情を見出さないものを擬人化し、感情を見出そうとする点

イ 赤い物が何なのか、誰の視点なのか分からず、肝心の言いたいことが書かれていない点

ウ 独特な着眼点を持ち、それを歌として詠んでいる点

エ 「ちよんちよん」という表現や、「雀」「金魚」など、あまり短歌で描かれないものが描かれている点

オ 「拭いてやりたし」「遠くへ行ったいんだよ」などと物を大切にしている点

5 この文章の特徴として、あてはまるものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 藤田さんと自分が会ったことを細かく具体的に描きながら、二人の関係性の変化を伝えている。

イ 藤田さんの人柄が想像と違っていたことに驚き、幻滅していく様子が皮肉を交えて描かれている。

ウ 自分と藤田さんの性格の違いを描くことで、かえって自分の歌人としての才能を強調している。

エ 藤田さんと自分の様子をコミカルに描きながらも、藤田さんの歌人としての才能を伝えている。

オ 藤田さんの歌人としてのすばらしさを伝えるために、あえて最初に藤田さんの短所を描き出している。

4 次の文章の主人公は『不思議の国のアリス』のアリスに自分を見立てていて、本文の太字部分は『不思議の国のアリス』の引用です。次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

そのウサギが「たいへん！ たいへん！ 遅刻しちゃうぞ」と言っているのが聞こえても、アリスはべつだんおかしなことと思わなかった。

ねえウサギ、そんなにあわてふためかなくたって、遅刻なんかしないからだいじょうぶよ。あと三分あればしたくは完了、七分後に玄関を出れば、そこには美樹ちゃんの姿が見えて、「アリス、おはよう」「美樹ちゃんおはよう」っていういつもどおりのあいさつを交わして、なかよく学校に。学校にはもちろん余裕で到着。

小学校入学以来、わたしが一度だって遅刻しなかったことを、あなた、知ってるでしょ。って、わたしは、ウサギに話しかけた。
① わたしはアリス。

わたしがアリス。
といつても、残念なことにあのお話のアリスではなく、さらに残念なことに、アリスっていうのも正式な名前じゃない。

正式なほうは、小林佐知子っていうの。そう、それがわたしのほんとうの名前。戸籍上の、っていったほうが正しいかしら。この名前、パパが考えたらしいけど、まったくセンスを疑っちゃうでしょう？ こばやしちこですって。字はちがうけど、あの演歌歌手と同名同名だなんて、平成生まれの女子中学生に

(注1) あるまじき名前だって思わない？

ちなみにママの名前は理佐。ママは昭和の生まれだけど、リサっていうサウンドはぐっといまっぼい。

それなのに、なんでわたしが佐知子なわけ？ それでわたしは、わたしの名前をアリスって決めた。ほんとうなら、正式な名前もアリスにしたいって、わたしは思う。だって、自分の名前よ。自分の名前を自分でつけられないのっておかしいじゃない。

わたしが法律を作る人間なら、自分の名前は自分で決めるっていうのをまっさきに作るけど。そして、自分の名前を大切に生きてみましょう、なんて(注2) 演説をぶつ……だめだめ、それはだめ。人前で、大きな声をだすなんて絶対だめ。

演説とか大きな声とかばかりじゃなくて、だれかになにかを話すのは苦手。じゃあ、わたしはおしゃべりじゃないかというところ、これがむずかしいところなんだ。なぜって、こうしてこころのなかでなら、いくらでも話しつづけることができるわけだから。これじゃ、おしゃべりなのかそうじゃないか、自分でもよく見極めがつかないってものだわ。

話がそれってしまったけれど、わたしが自分の名前をアリスとしたのは四年生の夏休みのことだった。

きっかけは、もちろんお話のアリス。夏休みの読書感想文を

なににしようかなって思いあぐねていたら、ママが薦めてくれたんだ。おもしろいわよって。

それで読み始めて、読み終えたときに、わたしは決めた。決めたって言うよりわかったって言うほうがびったりくる。

この子ってわたしだって、わたしは思った。感受性っていうのかな、なにかが起きて、それに対してどう思うか、どうふるまうか。わたしならこうするっていうことを、アリスはしていた。

それにわたし、白ウサギにそっくりな——チョッキを着てそのポケットに懐中時計をつっこんでいる——ウサギのぬいぐるみも持っているんだ。

そのウサギは、わたしの誕生のお祝いで、わたしが生まれた日に、ママの大親友の春子おばさんが抱えて病室に来てくれたんだって。ウサギはわたしの生涯初のプレゼントになって、それ以来十三年間、ずっと一緒。まったく運命を感じるでしょ。

そんな運命のウサギをプレゼントされた赤んぼうには、はじめからアリスってつけるべきだけど、さっきも言ったように、パパのセンスは疑わしい。

疑わしいどころか、十三年一緒に暮らしてみてもわかったのは、どうやらパパには疑うべきセンスもなかった、ってこと。

わたし、パパのセンスがどこかに落ちてないかってずいぶんさがしたわ。それはわたしが心優しい娘だってこともあるけど、自分の父親がはじめからセンスの持ちあわせがないなんて、思いたくなかったからっていうのもある。正直に言えばね。

アリスがさがしものをしているのに気づいたウサギは、「こんなところでなにしてるんだ。さっさと帰って、手袋と扇子を持ってくるんだ」と、どなった。アリスはただおどろいて、ウサギが指差すほうに駆けていった。

ははあ、そういうことだったのね。パパの扇子、じゃなかった、②を持ってっちゃったのはウサギ、おまえだったってわけね。

さあ、はやくパパに②を返してあげて。できることなら、わたしが生まれるまえにちゃんと返してほしかったけど、それはもうしかたないことだから。

ほら、ウサギ。
わたしが呼びかけても、ウサギは(注3)だんまりを決めて答えようとしない。

ねえ、ウサちゃん。いい子だから、かくしてないで返してちょうだい。

わたしはウサギにむかって猫(注3)なで声(注4)をだして、
をとる。でもだめ。③ウサギ(注4)たらこのごろ、わたしの間いかけにあまり反応しなくなった。わたしがもつとちっちゃくて、ウサギがもつと若かったころ、わたしとウサギはいっぱいおしゃべりしてたのに。年をとって耳が遠くなったのかもしれない。そういえばあんなに真っ白だった毛も、すこしうす茶色に変わってきた。

「佐知子、したくはすんだのかあ？ まにあうのかあ」
ウサギの代わりに階下の台所からパパののんきな声が聞こえた。

佐知子じゃないってば、アリスと呼んでよ、というのほわたしのここの声で、

「はあい、いま行く」
というのが現実ひびに響く声。

ああ、なんていいお返事。なんていい子。^④ そんな自分を自分で半分ののしりながら、わたしは階段をおりていく。

「ほら、もう時間だろう？」
「うん、あとちょっとだね」

そう言ったあと、つけっぱなしになっているテレビの画面左上に表示されるデジタルの数字が、715になったのを確認して玄関に向かう。

朝ごはんの後片づけをしていたパパが、タオルで手をふきながら、ついてくる。来なくていいから。

わたしが靴くつをはいているあいだに、パパはいち早くサンダルをつっかけ、玄関のドアをあける。あけてくれなくていいから。

そうして開け放たれたドアを一步でたとたん、
「アリスー！」

と、わたしを呼ぶ声は^⑤美樹ちゃんだ。

美樹ちゃんは、幼稚園ようちえんからずつといっしょの大親友で、小さいころはわたしをさっちゃんって呼んでいた。けれどいまはアリスって呼ぶ。

「おはよう、美樹ちゃん」

美樹ちゃんに駆けよりながら、わたしは朝のあいさつをした。

「おはよう、アリス、きょうはおじさんだね」

「あ、うん」

半端はんぱな感じで答えるわたしとは大ちがいに、美樹ちゃんは、
「おはようございまーす」

と、まだ玄関口に立っているわたしのパパにもあいさつをした。

「おはよう、美樹ちゃん。今日も元気がいいねえ」

パパが大きな声で答える。

「はーい、元気です」

と美樹ちゃんも負けずに答える。中二女子の愛らしい満面の笑みも添そえて。信じられないことに、美樹ちゃんはパパをかなり本気にお気に入りなのだ。

美樹はさっちゃんのパパ、好き。って、幼稚園のころ言っていた。幼稚園のころから、わたしたちの友情が変わらなかったように、パパへの愛情も変わらなかったみたいだ。ありがとう、美樹ちゃん。

それだからってわけでもないけど——いややっぱり、それだからか、

「美樹ちゃん、佐知子、行っておいでえ」

のパパの声に、

「はあい」

と、返事をしたのは美樹ちゃんひとりだった。

パパがわたしたちふたりに手をふっているのが、ふり向かなくてわたしにはわかる。もう。と、わたしは思う。もう、家にはいつてくれていいから。最後のほうなんか、祈りをこめてしまう。お願いです。早く家におはいりください。

ママがいるときは、ママが同じように見送ってくれる。いや、同じようにじゃない。もつとさりげなく、いい感じに。でも、ママがいないうち、パパは頼まれもしないのに、ママの代わりをする。あんなふうに大げさに、ださださに。毎日毎日、パパにこんなことされたら、わたしだってきれる。ううん、あきれ。毎日じゃないのがせめてもの救いだ。

「おばさんは？」
と、美樹ちゃんが聞いた。

「家出中」
と、わたしは答える。

ほんとに家出しているわけじゃなくて出張だけど。このことは美樹ちゃんも知っているから、おどろいたりはしない。おどろくかわりに、

「今度はどこ？」
と、重ねての質問。

「香港」
「香港？」

「そう、あの……」
⑥「巨大な顔の香港だ」

と、美樹ちゃんは言った。

それから美樹ちゃんとわたしは、香港香港香港でっかい顔の香港と唱和した。

「まったくあのときは参ったね」

「ほんと、マジでこわかった」

「ごめんね」

と、わたしはあやまる。美樹ちゃんになら、わたしはいつだって素直でいられる。

「マジでこわかったけど、めっちゃおもしろかった」

美樹ちゃんがそう言って、わたしたちは笑う。あのときのことを思い出して笑うたび、笑っているいまが楽しいって、実感する。ママが香港出張に行くこと必ずこの話題になってわたしたちは盛りあがる。香港香港香港。

わたしたちがまだ幼稚園だったときのことだ。美樹ちゃんとわたしが遊んでいると、いきなりドアがあいて、巨大な顔がはいつてきた。細いからだの上の顔はゆらゆらゆれて笑っていた。不気味だった。怖かった。美樹ちゃんとわたしとどっちが先に泣きだしたんだろう。どっちが先かわからないくらい同じタイミングで泣きだして、その泣き声は家の外までも聞こえた。

「ごめんごめん」

くぐもった声がして、顔が取れた。

か、か、顔が取れた！ それを見て、美樹ちゃんとわたしはひきつったように泣いた。完全にパニックだった。

恐ろしいものの正体がママだとわかったのは、それから三十分以上も経って、わたしたちがすっかり泣きつかれたあとのこ

とだった。まったくひどい母親だとそのときは思った。おとなげないといまは思うけど。

商社勤めという仕事柄、ママは中国やタイやインドネシアに行く。行き先がアジアばかりなのは、ママはアジア地区担当だから。そして行った先々でおかしなお土産を買ってくる。

指の先につけると魔女の爪みみたいになる金色の……つけ爪？
つけ指？

使い方がわからない木製の楽器。ぐるぐる回したり、ぼんぼんたたいたりするしか、音をだす方法は見あたらなかった。それが、楽器というよりおもちゃみたいでけっこうおもしろかつ

注1 あるまじき Ⅱ あつてはならない

注2 演説をぶつ Ⅱ 演説をする

注3 だんまりを決めて Ⅱ 強い意志でものを言わず

注4 懐柔策 Ⅱ うまく扱って、自分の思う通りに従わせようとする事

1 ー線①「わたしはアリス。」とありますが、なぜ佐知子は自分の名前を「アリス」としたのですか。その説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分の名前を古くさく感じたから

イ ママの名前のように現代的な響きに近づけたかったから

ウ 自分の名前は大嫌いなパパにつけられたものだから

エ 『不思議の国のアリス』のアリスに自分がびったり重なったから

オ 生涯初のプレゼントが『不思議の国のアリス』の白ウサギにそっくりだったから

た。

小さかったころはいちいちおどろいたり喜んだりしたけれど、いまはそれほどでもない。それほどでもないけれど、まったく興味がわかないっていうのでもなくて、ママが家出——
じゃなかった出張に行くたびに、毎回、今度はなんだろうって
思う。

⑦

と言ったのは、わたしではなく美樹ちゃんだった。

(石井睦美『都会のアリス』岩崎書店 による)

2 ②に共通してあてはまることばとしてふさわしいものを文章中から探し、書きぬきなさい。

3 線③「ウサギったらこのごろ、わたしの問いかけにあまり反応しなくなった。」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア ウサギは佐知子とパパの良好な関係性を表し、その関係が悪化しているから

イ ウサギは佐知子の現実逃避を映し出したもので、佐知子が現実を受け入れるようになったから

ウ ウサギは「返してちょうだい」という佐知子の願いを聞き入れるつもりはなかったから

エ 佐知子自身が成長して、ウサギの反応を内心期待しないようになってきたから

オ ウサギは佐知子のかなわぬ願いを表す存在で、その願いを佐知子があきらめかけているから

4 線④「そんな自分を自分で半分の中のしりながら」とありますが、これはどのようなことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア うつとうしく感じているパパに対して、外見的にはいい子であるように振る舞っている自分自身を皮肉っている。

イ 本当はパパに気に入られたいのに、素直になれない自分にあきれている。

ウ アリスと呼んで欲しいのに本名で呼ぶパパに怒りを感じ、その気持ちを出さずに抑えている。

エ ウサギにしか本当の気持ちを出せない自分の心の弱さを理解し、もっと成長したいと苦しんでいる。

オ 本当はいい子ではないのに、どうしてもパパに気に入られようとしてしまう自分自身が好きになれないでいる。

5 線⑤「美樹ちゃん」とありますが、佐知子、パパ、美樹ちゃんはどのような関係性ですか。その説明としてふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で書きなさい。

ア 美樹ちゃんは佐知子のパパのことを気に入っており、良いあいさつをすることで佐知子より自分を気に入ってもらおうとしている。

イ 美樹ちゃんは佐知子と幼なじみで、佐知子のことを心から理解し、心が通い合っている。

ウ パパは佐知子が自分に反抗しているのをうすうす感じていて、親友の美樹ちゃんに取り入ろうと、おおげさな態度で振る舞っている。

エ 佐知子はパパの「ださださ」な態度に愛想をつかしており、美樹ちゃんにもその自分の気持ちに共感してもらおうとしている。

オ 美樹ちゃんがパパに好感を持ち続けてくれることに感謝しながらも、パパの行動にあきれている。

6 ———線⑥「巨大な顔の香港だ」とありますが、筆者はこの「巨大な顔の香港」のエピソードを語ることで、読者にどのようなことを印象づけたいのだと考えられますか。次の（ ）にあてはまるように、（A）を二十五字以内、（B）を十五字以内で説明しなさい。その際、（A）には「今では」ということばを必ず使うこと。

（ ） A （ ）を共有することによって、（ ） B （ ）ということ

（下書き用）

A			
を共有することによって、			
20			

B		
ということ		
12		

7 ⑦にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア あの時はこわかったね。
- イ 今度はなんだろうね。
- ウ アリスのパパ、さびしいだろうね。
- エ 香港、いつか行ってみたいな。
- オ おばさんには早く帰ってきてほしいね。

8 この文章の表現の特徴として、**あてはまらないもの**を次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 佐知子の心の中のことばを中心として物語が語られていて、佐知子の気持ちになって読むことができる。

イ 『不思議の国のアリス』の作品中に使われていることばの引用があることで、現実世界と佐知子の空想世界をうまくつなげている。

ウ ありのままの女子中学生のことばがそのまま本文に使われることで、年代の読者が身近に感じられる効果を生んでいる。

エ 佐知子とウサギのことばのかけあいを中心に構成されていて、心の中に棲みついたウサギとの心の交流が描かれている。

オ ユーモアあふれる佐知子の心の中の言葉が効果的に使われ、リズム感のある言葉遊びが生きている。

⑤ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

二〇世紀の経済における一つの特徴は、^(注1)規格化された^(注2)画一的な商品を大量に生産・消費してきたことです。それにもなつて、地域の固有性も失われていきました。地域それぞれに、歴史や風土に根ざした多様な暮らしがあったのですが、^①近代的な開発のもとでどんどん失われていったのです。

しかし現代では、そのような経済の仕組みは行き詰まり、これまで失われてきたものが見直されるようになっていきます。人びとはこれ以上「モノ」の量的な豊かさを求めるのではなく、それによって得られる「知識」や心温まる「感動」といった無形の要素を重視するようになりました。このような^(注3)ニーズの変化は、^②従来の経済活動や価値に対する考え方を大きく変えています。

たとえば「モノ」の機能は変わらなくても、あるいは時間がたつて劣化^(注4)したとしても、そこに「意味」や「物語」(ストーリー)が加わることで価値が大きくなります。

^③がわかりやすい例ですが、時間がたつと「モノ」としては劣化しても、歴史的な評価に耐え、生き残ることでむしろその価値は高まります。これは、作品というモノそれ自体ではなく、そこに与えられた「意味」が価値の根拠^(注5)になっているためです。モノの「意味」が深まって、見ている人の知識や情動が高まれば、それにしたがって価値も増加するのです。

従来の経済の常識では、労働を投下して、新しい財やサービスをつくりだすことよつてのみ、経済的価値は生まれるとされてきました。ところが、何ら新しいものを生産しなくても、すでにあるものに対して「意味」を与えることで価値が高まるのならば、経済活動の様相は一変します。そのため、現代では「モノづくり」だけでなく、「コトづくり」(ストーリーの生産)が重要になっているといわれます。

もちろん、見えるもの、ふれられるものがあつてこそ五感^(注6)は刺激^(注7)されますから、「コトづくり」の時代に入つても^④「モノづくり」の重要性は失われません。大事な点は、そこに知識や情動、倫理^(注8)や美しさといった無形の要素がどれだけあるかです。

「^(注4)限界費用ゼロ社会」という表現があるように、すでにあるモノをコピーしたり増やしたりする生産は、デジタル化などの技術によつて、限りなく費用ゼロでできるようになります(ジュレミー・リフキン『限界費用ゼロ社会——モノのインターネットと共有型経済の台頭』NHK出版、二〇一五年。「限界費用」とは経済学の用語で、生産量を一単位増加させたときにかかる追加的費用のこと)。農業にせよ工業にせよ、規格品をたくさん生産するだけでは、値段を安くしていく価格競争に追いつまされてしまいます。

しかしたとえば、技術や知識をもった職人が、厳選された材料から精巧で美しい製品を生み出したならば、その製品はモノそれ自体にとどまらず、他にはない真実のストーリー、固有性を備えるでしょう。そこでは「ストーリー」のほうの主であり、「モノ」はその媒体ばいたいになっていきます。「コトづくり」の重要性が説かれるのは、このようにモノにどんな「意味」を付け加えるかが大事だからなのです。

⑤ 二〇世紀の常識では、地域の発展のためには産業が必要だと考えてきました。しかし、二十一世紀の経済では、追加費用をかけて、いま以上にモノを増やしていく(注5) ビジネスモデルは最小限になっていくでしょう。逆に、地域にあるものをそのまま使うことで、費用を節約することができず、大きな投資がなくても、地域の空間や暮らしそのものが、人びとに求められる「舞台ぶたい」となるわけです。

知識や情動が消費されるいまの時代に、もっともふさわしくない開発方式は、「(注6) スクラップ・アンド・ビルド」です。地域空間において堂々と積み上げられてきた暮らしの風景は、いちど壊こわされたらもとは戻りません。

スクラップ・アンド・ビルドは、工業化・近代化の時代には効果的な開発手法でした。かつては、地域の歴史やその場所のストーリーを「リセット」することこそが開発だ、と考えられていた時代がありました。しかし、建てなおされたその場所は新しくきれいかもありませんが、他の場所にも次々と新しいものはできるので、その場所ならではの個性を保っていくのはなかなか大変です。

これに対して、歴史のある自然や建物を、完全にスクラップせず、むしろその雰囲気ふんいきを守りつつ、時代にあつた機能や意味を加えて再生する手法が「リノベーション」です。第3章でもふれたように、リノベーションとはもともと建築用語で、中古の建築物に対して、現代的に機能・価値を再生するために全面的に改修する事業をさします。

たとえば大阪には、昔たくさんつくられた長屋建ての住居があります。その起源は、大阪が商人・町人のまちとして発展した近世にあり、近代に入ってから自治体の都市計画によって再整備されてきた歴史があります。大阪の長屋は、このように長いあいだ引き継つがれてきた庶民しよみんの暮らしを象徴する「大阪らしい」建造空間です。一時期はその価値が認められず、老朽化ろうきゅうかが進むにつれ取り壊とこわされてきましたが、近年は、(注7) レトロな雰囲気や(注8) コミュニティ感覚が再評価されて、店舗、事務所、宿泊施設しゅくはくしせつなどにリノベーションされるようになっていきます。モノとしては古くなり、その点では価値を失っていても、別の角度から「意味」を与えられることで、価値が再生するのです。(注9) 写真5・1は、大阪阿倍野区あべのにある昭和初期に建てられた長屋を改修し、飲食店などに利用している事例です。

地域空間に対しても、さまざまなタイプのリノベーションが展開されています。これまでは、開発しやすいように土地を（注10）更地化するのが大前提で、特別に歴史的に価値があると認められる建物が点的に保護されるだけでしたが、本当は、あらゆる場所に歴史があります。

巨額の設備投資によって空間を新しくつくりだすよりも、地域の文脈を読みこみ、再解釈して、求められている「生活の質」や「地域らしさ」を表現することが、むしろ現代的な開発手法になっています。このほうが大きな費用をかけずに済みますし、地域に新たな価値を与えることができますのです。^⑥ 大阪の長屋リノベーションも、現代的な市街地再開発だといえます。

（除本理史・佐無田光『きみのまちに未来はあるか？——「根っこ」から地域をつくる』岩波書店 による）

注1 規格化 〓 製品の品質・形状・寸法などを決めて統一すること

注2 画一的 〓 何もかも一様で、個性や特徴のないさま

注3 ニーズ 〓 必要・要求

注4 限界費用ゼロ社会 〓 同じものをいくら作ってもお金がかからない社会

注5 ビジネスモデル 〓 経営戦略

注6 スクラップ・アンド・ビルド 〓 古くなった設備などをこわして捨て、新しい設備に置きかえること

注7 レトロ 〓 古いものを好むこと、また、そのさま

注8 コミュニティ感覚 〓 仲間意識

注9 写真5・1 〓 原文には写真が掲載されているが、ここでは写真を省略した

注10 更地化 〓 すぐに建物が建てられる状態の土地にすること

1 〓 線①「近代的な開発のもとでどんどん失われていった」とありますが、どのようなものが失われたのでしょうか。あてはまるものを次の中からすべて選び、記号で書きなさい。

ア 高層マンション イ 段々畑 ウ 小さな集落 エ 国境 オ 駅

2 — 線②「従来の経済活動や価値に対する考え方を大きく変えています」とありますが、ここで述べられている経済活動の説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 従来の経済活動は、規格化された画一的な商品を大量に生産・消費してきた。

イ 従来の経済活動は、「モノ」の量的な豊かさを求めてきた。

ウ 新しい経済活動は、「モノ」より「コト」に重点をおいている。

エ 新しい経済活動は、「スクラップ・アンド・ビルド」で、古き良き時代を作り出そうとしている。

オ 新しい経済活動は、時代にあつた機能や意味を加えて再生する手法を取り入れようとしている。

3 ③にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 芸術作品 イ 農業機械 ウ 魚介 エ 高層ビル オ 化石

4 — 線④『モノづくり』の重要性は失われません」とありますが、これはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア モノを大量に作るのは近代の産業にとって重要な要素だから

イ 新しい技術で劣化しないモノを作ることができるようになったから

ウ 豊かな経済活動のためには、モノを作ることが欠かせないから

エ 新しいモノを作らなくても、歴史的な価値が生まれるから

オ モノと出会うことで、そのモノに付加された意味を感じられるから

5 — 線⑤「二〇世紀の常識では、地域の発展のためには産業が必要だと考えてきました。」とありますが、では、二十一世紀の常識はどのようなと考えられますか。その具体例としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア たくさんさんの工場を建てて、人が働ける場所をつくる。

イ 多くの人が利用できるホールや展示場をつくる。

ウ 川にダムを建設し、電力供給システムをつくる。

エ 土地を買い占めて、大きな商業施設をつくる。

オ 郷土芸能をもとにした、独自の祭りをつくる。

6 — 線⑥「大阪の長屋リノベーションも、現代的な市街地再開発だといえます。」とありますが、なぜ大阪の長屋のリノベーションは、「現代的な市街地再開発」だといえるのですか。次の（ ）にあてはまるかたちにして、四十字以内で書きなさい。その際、必ず「再生」ということばを使うこと。

() から

(下書き用)

から						
						32

7 この文章の内容と合っているものをすべて選び、記号で書きなさい。

- ア 二〇世紀は、地域の固有性などが失われた時代であった。
- イ 「モノ」として劣化すると、価値もストーリーも全くなくなる。
- ウ 二十一世紀は、モノの価値が認められず、老朽化が進むと更地化される。
- エ 二〇世紀は、巨額の設備投資によって新しい空間を作り出していた。
- オ 古くなったモノは、すべて取り壊してリノベーションすることで、価値が生まれる。

(問題はこれで終わりです)

